

趣味は異炉偉炉から

●暗室での出来事/高校時代の日記より

4月10日(月) 天気 晴

今日はまったくまいった。土曜日の鉄研の相談で、朝10時から写真を焼くべく学校へ行った。新入生の入学式の日でもあった。何か今年の一年生はやたら背がでかい感じ。ガリ勉ちゃんが非常に多いみたい？女の子は例によって…でも何人か可愛い子がいた。

写真材料屋で印画紙やら現像液やらを買ってきて始まった。昼はパンで先輩たちの奢り、気に入ったSL写真をせっせと焼いた。四つ切りから半切、最後に全紙、それぞれ30、12、12枚と合計54枚。これをなんと一日で全部焼いたのだ。

当然えらい時間になってしまった。そして全紙を焼く番、Kがペけになった。この時、嫌な予感がした。……**案の定**……これから全紙を焼こうとしたまさにその時、「ドンドン ドン！」『中にいる奴、早く出てこい！』数学のカマキリことH先生の声だ。KとIはヤバいと顔を見合わせたが、先輩たちはしばらく様子を見た後、「こんな機会はめったないから残りをやいちゃえ！」と言った。

気が気ではなかったが、残りの全紙をすべて焼ききってしまった。しかし、それがカマキリ先生の態度を硬化させた。結局、水洗中の写真を取り上げられて、こっぴどく怒られて学校を後にした。

4月11日(火) 天気 晴

重い足取りで学校へ向かった。昨日はまともに謝っていなかったので、休み時間 I と数研へ行ってカマキリ先生に謝ることにした。

「実は昨日 写真部ではなく鉄道研究会メンバーですから、写真部には迷惑のかからないようにおねがいます。すいませんでした。」……すると、意外や意外「あっ、そうですか。……では写真部に断ってあったのかい。」 「はい、部長に直に……。」そしたら大分カマキリ先生の態度がゆるやかになり、「判りました。」と言って許してくれた。

午後からもう一度、先輩たちと水洗いをして写真を乾かした。しばらくしたら、どういうわけか**英語**のY先生が来て、Kの全紙の写真を返してくれた。職員室で夕べの事件の話がでたらしく、それから他の先生たちも我等の写真を見にきた。担任のT先生、倫社のTa先生、物理のA先生、……とつかえひっかえ。教頭先生までやって来て、「これは関西だろう、山が低いもんね」と鈴鹿山地で撮ったD51の写真を指差した。受けた。承けた。大うけだ！

極めつけは化学の IM 先生だ。「うーん、なかなかいい写真だ。……現像液くらいなら今度調合してやるぞ」ときたもんだ◎

●木場の丸太乗り

江東区の木場はその名が示す通り材木商や、製材工場のメッカで昔はたいそう栄えた下町の一角である。Kの父もその中のいくつか、ベニヤ工場がお得意先で所謂、木屑焚きボイラーの修理でよく出かけていた。輸入のラワン丸太を機械で削り、繊維を互い違いに接着剤で貼りあわせ、乾燥させて製品にする。

ラワン材は表面が真円になるまで粗削りされ、製品に供給される大部分を奇麗に寸分違わず削られていくと、最後に15センチ程の心棒が残る具合だ。

最初の荒削り材をチップにして、また最後の心棒を薪代わりにして共にボイラーの燃料として使う。ボイラーから得た蒸気をベニヤの乾燥に上手に利用するのだ。とても無駄がなく、昨今 叫ばれているリサイクルの代表選手の様 Kには思われた。ただ、不良品をチップにしたベニヤの接着剤が耐火材に悪さをする。

あれは忘れもしない高二の春休みだった。Kはベニヤ工場の工事の応援で出かけた。物好きな性格のため、休憩時間はあちらこちら見てまわっては自分の好奇心を満足させていた。

乾燥機の中、丸太を削る大きな製材機械、貯木場から丸太を引っ張りあげるウィンチ等。エトセトラ、…… しかし、その日に限って貯木場の池に目がとまったのである。なんと、原木の丸太群（筏）がぐるっと池の周囲に円を描くように浮かんでいる。めったないチャンス！！

泳ぎが得意でないのも忘れ、Kは最初の筏の上に飛び下り、安全を確かめてから飛び跳ねはじめた。丸太同士はかなりごっつい楔で固定されており、十分水分を吸っているためほとんど動かなかった。

しかし、最後の所で立ち止まった。今までの様に楔に留まっておらず、後一か所のその丸太はとても太く単体で、まだあまり沈んでいなかったのだ。……『行くしかない！』覚悟を決め飛び移った。しかし所詮俄か作りの「因幡の白兔」。飛び移った瞬間、ゴロンと回転し、Kは貯木場の池の中（到底足の届かない水深）に全身完璧に埋没してしまったのであった。



幸い、当時金づちに近かったKではあったが、なんとか別の筏に這い上がり
こと無きを得た。近所のおじさんが二階から見ていたらしく、『おーい大丈夫
か?』と言われ恥ずかしかった。さらに、会社の人に「落ちた瞬間、丸太が真
上に寄って来て、助からないこともあるんだよ」だって…

●サラブレッドは煙に揺れて

二度目の北海道夏旅行は前半最悪であった。中学時代の親友 Ka を誘って、
鉄研の I と三人で出かけたまでは良かったが…… 釧網本線にC-58 の三重連
が走るとの情報でオホーツク海沿岸の原生花園乗降場（夏場のみ）へ行ったと
きのことだ。

父から借りていた一眼レフのカメラを盗まれてしまったのだ。呆然と立ち尽
くすKの目の前を、轟音もろとも三台の機関車が引く特別貨物列車は地平線の
彼方へ消えていった。

必死で探したが、見つからず大枚叩いてタクシーに乗り、網走の警察に届け
出た。「怒られるだろうな、どうしよう……」まだ三日目なのに、でもすぐ
帰って謝った方がいいかな。気分は落ち込んでいった。 **憂鬱**

結局、おそろおそろ電話をかけ謝ったら、許してくれたのでカメラなしで所
在なかったが、旅を続けることにした。周遊券ももったいないし…

翌日は気を取り戻して、サラブレッドの故郷、日高本線へ行くことにした。
苫小牧から襟裳岬の玄関口、様似まで、数々の競走馬を育てた牧場地帯。本線
とは名ばかりでとてもローカル色豊かな線だ。しかし、アイヌ民族と悲しい戦
争があった土地でもある。本土と違った雄大な景色のとりこになりつつあった
Kは、北海道の地名の大半がアイヌ語からきており、興味をいだいていた。

そんな訳で沿線最大の町、シャクシャインの乱があった町、静内へ行くこと
にした。でも本当は機関支区があることが一番の魅力だったのかもしれない。

まず、海岸で遊んでから、大盛りラーメンで腹ごしらえ。駅の反対側から
Ka と遠回しで機関区へ。「見学して、機関車の撮影や、スケッチ（カメラな
しのK）いいですか?」…「あっ、いいよ、いいよ」と快諾。

「どっから来たの? へっ、東京! わざわざ東京から来たんかい!」
「上野のそばです。」と答えると 昔、常磐線で機関車を運転してたと言う区
長さんは懐かしげ。機関区内の床屋さん、おばちゃんまで出て来て大騒ぎ。

Ka のカメラを傍目に、Kはしかたなくスケッチブックを取り出し、給炭場

で石炭を積んでいたC-11 176号機の絵を描き始めた。

すると、後ろから「俺らも休みの日は函館本線までC62の写真撮りに行くんだ。……これからどっちへ行くんだい？」と三十代後半くらいの機関士さん。

「牧場の日高三石まで行きたいんです。」-----『そしたら、これに乗ってくかい？』

『ええっつ、本当ですか！！！！』…『偉い人には内緒だぞ！ あの信号機の手前まで待ってるから…』-----

区長さん達にお礼を言って、-----ワクワクソワソワ……『本当に運転室でいいんですか？』『おっ いいよ』 若い機関助手さんもしっかり、まもなく……『出発進行！』と指差呼称、汽笛の紐が引かれ、……

『ぼおーっ ！』 加減弁がゆっくり開かれ、シリンダーからドレインをまき散らし『しゅっ しゅっしゅっ……』 KとKaを乗せたC-11 176号機は数両の貨車を従えて、軽快に静内駅を後にしたのである。



●蒲鉾板の表札

高校時代はSLの撮影旅行に明け暮れ、すでに無煙化していた四国を除けば、汽車の走っている日本全国のローカル線を歩き回った。しかし、浪人中はさすがに缶詰状態で、どんどん汽車が無くなっていくのに指をくわえている状

況だった。

SL列車はあと余命わずか。と同時に、Kはなにか趣味の中心となるようなSomething elseを必死で模索していた。

2年目の春、合格発表もそっちのけで山陰、北海道と欲張ってIと挽回すべく汽車を追った。だが、大学では鉄道研究会ではなく、旅行研究会に籍をおくことにした。SLに代わるのは今まで培って来た一人旅だとKは思い始めていたからだ。しかも目指すは貧乏旅の風来坊？！

高校、浪人時代とあまり本らしき本は読んでこなかったもので、夏休みに神田の本屋へ行って名作と言われている本どっさりを買って来た。とりわけ、宮沢賢治の童話集にいたく感動し、そのなかでも短編だが山の中の学校を舞台にした『風の又三郎』が気に入ってしまった。どこからともなく突然やって来て、分校の子供たちにうちとけて、いつのまにかいなくなってしまう、不思議な少年。これぞ風来坊の原点。これをKはペンネームにしようと決意した。

思い立つと行動の早い？K、押し入れの模型材料の引き出しから、あるものを出した。それは蒲鉾の板だ。かまぼこを剥がした板は厚みもあり、なかなかしっかりしているので、何時か模型のレイアウトか何かに使えると思って20枚くらいストックしてあった。その中の一番良さそうな板を選んだ。

次に半田ごての用意、十分熱してからその板に小手先を焼きつけた。文字は5文字。『風の又三郎』いいぞ、いいぞ。最後にミニトーチバーナーで軽く全体を焦して仕上げた。持ち歩き用 **風来坊の表札**の完成だ。

これから始まる風の又三郎の旅 銀河鉄道に乗ってさまざまな……